

第78回麻布獣医学会 一般講演9

重複障害児への馬を用いた動物介在活動の試み

要 武志¹, 村田 英一², 太田 光明¹¹麻布大学 動物人間関係学研究室, ²相模原市立陽光園・理学療法士

近年、馬を用いた動物介在活動あるいは動物介在療法による身体的・精神的効果が様々な研究により明らかになっている。なかでも、脳性麻痺児などへの乗馬の試みが報告されているが、その多くが、医師や理学療法士など特定の人間による身体的効果に関するもので精神的効果を含めて評価している論文はほとんどない。

肢体不自由だけの単一障害児でさえも将来の社会自立はかなり困難であるのに、肢体不自由と知的障害の両方を抱える重複障害児では様々な問題を抱えている。

そこで本研究は、6人の重複障害児（肢体不自由・知的障害）を対象に計14回、20分程度の騎乗を含めた馬を用いた動物介在活動を行った。プログラムは個々に合わせたものを作成し、身体的・精神的効果を以下の方法で測定した。①理学療法士によるROM（Ranges of Motion, 関節可動域）とADL（Activities of Daily Living, 日常生活行動）の評価。②両親による身体面・精神面の変化（アンケート）。③ビデオ観察およびインストラクター・サイドウォーカーによるコメントを総合して、乗馬中の評価を

今回作成した乗馬上達スケール表でスコア化した。

その結果、バランスの改善や筋力の増加、麻痺の軽減、股関節可動域の屈曲・伸展、発声発語で改善がみられた。6名中5名で姿勢が安定し、筋緊張の強い2名では下肢の筋緊張の低下がみられ、他の3名では移動手段の改善がみられた。また、馬や動物に対する好奇心の向上により情緒面の成長、コミュニケーション能力の向上、集中力・理解力の向上がみられた。これらは騎乗することで得られる刺激に加えて、個々に合わせたプログラムによる効果だと考えられた。以上のことから、馬を用いた動物介在活動の試みは、重複障害児に対して、ADL（日常生活行動）を向上させ、これにより、介助面での負担が軽減し、それが、QOL（Quality of life, 生活の質）の向上にもつながるのではないかと推察した。

また、乗馬の頻度は2週間に1度よりも1週間に1度のほうがより効果があらわれやすかった。

KEY WORD

動物介在活動, 馬, 重複障害児, ROM (関節可動域), ADL, QOL